

《書評》

『深化する歴史学：史資料からよみとく新たな歴史像』

歴史科学協議会編、細谷亨*ほか著、大月書店、2024年

坂口 正彦[†]

本書は歴史学の新しい知見を「史資料を使ってわかりやすく解説することを目的」とする（3頁）。その構成は第1章原始・古代（計7本）、第2章中世（計8本）、第3章近世（計9本）、第4章近代（計8本）、第5章現代（計7本）、コラム（計7本）である。「史資料」という言葉は「文献史料以外のモノ資料、たとえば絵画や写真などの図像資料」や土器、建造物などの資料の存在を組み込んで議論するために用いられる（3頁）。

評者は各論稿を束として捉えた時に、本書がいかなる視点を投げかけるものなのかに強い関心を持った。そこで以下では、評者なりに各論稿を〈社会認識と歴史学〉、〈民衆を捉える視点〉、〈国際的な視野に立つ〉、〈史料批判の方法〉という4つの束で捉え、内容紹介と批評に代えたい。

＊

〈社会認識と歴史学〉について。第1に社会認識の変化により、新たな史資料の解釈が可能となることが示されている。第2章第1節によれば、研究史において藤原頼長の同性愛は「政治的ネットワーク」を作るための行動であると捉えられてきた。こうしたなか、近年において「現代セクシュアリティ論」からの見直しが図られ、「ポリガミーな性的関係」は「感情のもつれを生じやすい」ため、「政治的ネットワーク形成の手段」には向かないとの知見が提示された（63頁）。さらに近年では「『女犯』が学問にとって禁忌だったからこそ、頼長は勉学に集中する時期、性欲を同性に向けた」との理解に達している（64頁）。このように「現代セクシュアリティ論」が研究史を進める重要な契機になっている。

関連して、社会認識の変化はジェンダー史の進展を促した。第1章第2節によれば、埴輪は被葬者の姿が反映されているとの仮説に立つと、「古墳時代から終末期」において一定の女性首長が存在したとの知見が導かれるという。女性をかたどった埴輪は男性首長の従者であろうとの暗黙の思考を疑い、「背の高い女性の人物埴輪」を首長と推定することによって可能となった知見といえる。

また第5章第4節によれば、高度経済成長以前は多就労社会、これ以後は近代家族像とそれにとともなう性別役割規範が支配的となる。こうしたなか占領期において労働省婦人少年局は、多就労社会においてなぜ女性だけがリストラされるのかを紙芝居によって問いかけた。これは戦時期と高度経済成長期に挟まれた占領期固有の女性の問いかけ（抗い）を示すものであり、女性と労働をめぐる歴史の

* 立命館大学経済学部 教授

† 大阪商業大学経済学部 准教授

段階性が提示された。

さらに社会認識が歴史像を規定する側面があるため、先行研究の知見がいかなる社会認識のもとで書かれたのかを問う作業は重要である。この点はとくに第2章第6節で展開された、「土倉」を第一義的に高利貸しと捉える理解は「研究者をとりまいていた社会状況を応用させたものだった」との批判に示されている（94頁）。また、人間は形を変えて同種の社会認識を抱くとのメッセージも示唆に富む。第1章第7節によれば、疫病は常に外部から襲来するとの認識は、よそ者に対する排除、差別を伴いつつ、古代においても近年のコロナ禍においても表出したという。さらに本書は、眼前にあるものを自明視しないとの社会認識の必要性を提起する。第1章第4節によれば、万世一系論は強固に存在し続けたものではなく、道鏡の天皇即位を阻止した宇佐八幡神託事件によって確たるものになったという。

＊

〈民衆を捉える視点〉について。まず民衆を組み込んで歴史を捉えることの重要性は、とくに第2章第2節において強調される。すなわち、荘園は領主側が独断で土地を囲い込んだようにみえるが、実際は現地住民の証言をもって決定する事例が一定の割合で存在した。今後は権力者側の視点である「立荘論」に、民衆の活動実態を組み込んだ議論が必要であるという。

加えて第2章第7節によれば、「家印署判」は「略押」と名づけられるにすぎない存在であったが、重要かつ固有の意味がある。「家印署判」は生業を営むうえで必要な相互識別のために用いられ、これが家で継承されて家印となり、村落構成員であることを示す証拠にもなった。家・村の成立・展開を捉えるために「家印署判」研究は不可欠なのである。

民衆の「世界観」に「寄り添う」ことにより、研究を更新する方法が示された。第5章第3節によれば、食糧メーデーは共産党・社会党が先導しながらも運動を「天皇への上奏」という方法でのぞみ、これを先行研究は運動の敗北とみなした。しかし、社共勢力は天皇と対峙するよりも民衆の世界観（天皇に対する感情）に寄り添うことで、「民衆の熱量を最大限に引き出すことに成功し」と解釈した場合（244頁）、それは運動の敗北を意味しない。この論稿に戦前期を対象とした第4章第4節を合わせれば、「民衆運動の論理」をたどる方法がより明確に知覚できる。

さらに民衆の心性を文芸作品によって把握する方法として、第3章第4節によれば『曾根崎心中』は入婿・養子の「立場の弱さ」が社会通念として存在したこと、こうした「弱い」男性をも「女性」は理解し、従うべきであるとの規範が広く存在したことを浮き彫りにするものだという。最後に、民衆を捉える際は「どのような立場の者も複数の属性を」持っており、属性のうちの「何を優先した」のかをふまえるべきだとの議論も示唆に富む（169頁）。第3章第9節によれば、キリシタンは信仰心が深いとの認識は人間をキリシタンという属性のみで解釈するものであり、キリシタンのなかには信仰の道よりも家経営の存続を優先し、自ら改宗する場合があることが示された。

＊

〈国際的な視野に立つ〉ことについて。「歴史総合」・「日本史探求」・「世界史探求」を通して日本史と世界史を分断せずに学習する実践が開始された（272頁）。こうした状況を背景として、本書は国際的な視野に立つ研究が複数にわたって提示された。たとえば第1章第3節では、墓地の売買契約書である「買地券」は日本では「ニセモノ疑惑」があったほど少ない。その一方、中国では数多く発見されており、一国史だけでは見えない「東アジアに広がる買地券文化」（28頁）が確認できる。また第1章第5節によれば「国風文化」は自明の存在ではなく、「同時代の対外交流による『中国文化』

の影響を積極的に評価するのか、あるいは『中国文化』を受容していても9世紀以前と比べて選択的になっている側面を重視するのか」を問う研究状況だという（42頁）。

第5章第1節の「満洲」移民に関する分析によれば、『植民する側』と『植民される側』の関係が非対称的である以上、史料もまた両者の権力関係に大きく規定され、後者の側は「史料が十分に残されていない」という（229頁）。こうしたなか、「植民される側」の史料として中国の知識人が書き残したものがあり、それは「中国民衆がはたして中国東北侵略の深刻さをどの程度理解しているのか」との疑念を表明し、中国「民衆の覚醒」を求めるものだという（232-233頁）。ほかにも本書では「首里王府」（第3章第3節）、「海防体制」の担い手（第3章第7節）、開港場・外国人居留地（第4章第1節）、帝国日本の肥やしと餌（第4章第8節）、「満洲」国軍出身者（第5章第2節）、沖縄の「チャイナ部隊」（第5章第5節）などの主体や場所から歴史を見直す営為が示されている。

＊

〈史料批判の方法〉について。まず、いかなるプロットのもとに史料が書かれているのか、なぜそのプロットが採用されているのかを問うている。第3章第8節によれば、近世アイヌ史ではしばしば人物誌（『近世蝦夷人物誌』）が用いられてきた。それは松前家などの悪政に対して「決死の覚悟で直訴を行うアイヌと、その訴えに応える仁君としての幕府役人という図式」で書かれており、こうした図式は「当時の幕府役人に広く共有された理想的な政治理念」、いわゆる「仁政回復のプロット」を示すものだという（162-163頁）。

こうしたプロットを見出す重要性は、明治期の地方名望家研究についてもいえる。第4章第3節によれば、明治期において実際は複数人間が担い手になったとしても、1人の名望家が地域経済を発展させたとのプロットにもとづく語りが存在する。それは共同性が一時的にではあれ弛緩し、「個人」が析出された明治期だからこそ生まれた言説である。

加えて史料の形式から思考を開始する試みが具体的に示されている。なぜ史料のタイトルと中身に乖離があるのか、その乖離には史料作成者の強い意図があるのではないか（第4章第2節）、なぜ女性公民権法案の否決を黒枠で囲まれた「訃報はがき」を用いて伝達したのか（第4章第7節）との問いを出発点に据え、新しい知見を導いている。

さらに第3章第2節における「書いてある文をそのまま読むだけでは不十分であって、引用された書物やその箇所を選び方、言及の仕方が、その時代に、想定された読者にとって、どのような意味をもったのかを考えねばならない」（125頁）との指摘は時期・地域を問わず、史料批判の方法として最も基礎に据えるべきものである。「書いてある文をそのまま読」まないと姿勢は、「マニュアル」という史資料から人びとが規律化される側面だけでなく、「マニュアル」を「自分の行為を洗練させる踏み台」（211頁）と捉え、その「アレンジ」を試みる人間を射程に入れた第4章第6節にもつながるであろう。

最後に、歴史学の基本といえる史資料の細部から研究を再構築する方法が提示されたこともまた意義深い。具体的には土器にはりついた栽培植物のわずかな痕跡から「縄文農耕論」を展開した第1章第1節、藤原道長による和歌「この世をば……」における1つ1つの品詞の再解釈によって道長像を描き直した第1章第6節、書簡の熟読によって山県有朋と桂太郎の一致点だけでなく差異を検出した第4章第5節などに示される。

＊

以上4つの束を設定し、論じてきた。本書をかたちづくる46本の論稿のうち、この書評に組み込め

たのは30本にとどまる。評者が取り上げたか否かにかかわらず、どの論稿も同様に重要な問題提起をなし得ている。本書は歴史学における最前線の考え方を、質を落とすことなく平易に、開かれた形で提示したものである。